

活動成果報告書

平成25年度（第17回）「チヨダ地域保健推進賞」

活動テーマ

学生ボランティアによる在宅重症神経難病患者のQOL向上を目指して
～趣味や楽しみを学生ボランティアと楽しむ在宅療養生活～

応募グループ名称及び氏名（グループの場合は代表者名）

島根県出雲保健所医事・難病支援課
代表者：岩野 真保

勤務先：島根県出雲保健所

所 属：医事・難病支援課

所在地：〒693-0021

島根県出雲市塩冶町223-1

T E L：0853-21-1191

F A X：0853-21-7428

E-Mail：iwano-maho@pref.shimane.lg.jp



◇活動方針

在宅療養中の重症難病患者は、家族や多くの医療・福祉関係者により医療や介護の支援を受けている。

長期間の在宅療養になるため、趣味や楽しみなども上手に生活の中に取り入れてQOLの向上を図りたいが、ケアが多くなると、症状や機器の管理、ケア等も高度な知識や技術を要するため、楽しみの部分には配慮しにくくなる傾向にある。

そこで、当圏域内で希望する在宅重症難病患者に対して、島根県立大学出雲キャンパスの学生ボランティアが訪問し、趣味や楽しみ、リラクゼーション、新たなコミュニケーションツールの練習などをふれあいの中で行うことにより、患者と家族のQOLの向上に資する。

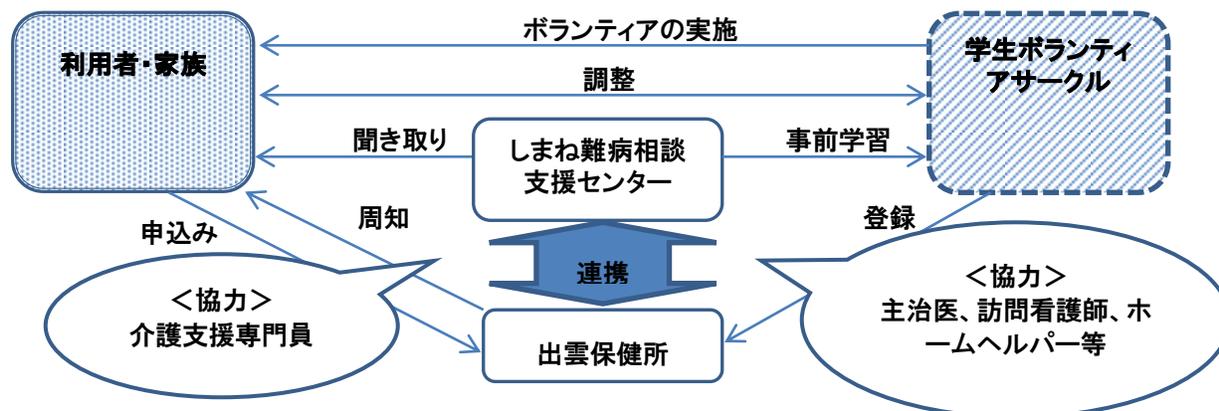
活動成果報告書

◇活動内容と成果

1 活動内容

学生ボランティアによる、患者や家族の希望する「楽しみ」や「趣味」「リラクゼーション」の支援、新たなコミュニケーションツールの利用にむけての練習などを行い、患者と家族の在宅生活におけるQOLの向上を図る。

<事業実施にあたってのフロー図>



- ・実施主体：島根県出雲保健所
- ・協力機関：しまね難病相談支援センター、島根県立大学出雲キャンパス
- ・事業対象者
 - ボランティア依頼者：在宅療養中で希望する重症神経難病患者、家族で主治医が許可した者
 - ボランティア実施者：島根県立大学の学生ボランティアサークルに属する学生
- ・事業評価：利用患者・家族への聞き取り、ボランティア実施学生へのアンケート

<事業実施にあたり準備したこと>

- ・依頼者の在宅支援チームに、学生ボランティアの介入について了解を得た。
- ・大学教員に対し、学生ボランティアのサポートを依頼するとともに、ボランティア実施にあたっての環境整備を支援した。
- ・学生ボランティアに対し、神経難病患者のコミュニケーションについての研修を実施した。

2 活動の実際紹介

<具体例：Tさん（ALS、人工呼吸器管理で在宅療養中、会話は困難）>

- ・学生2～3名ずつで実施
- ・頻度は週1回土曜日
- ・内容は、出雲大社の遷宮に関する写真や情報提供、顔や手のマッサージ、推理小説の朗読など、依頼者や家族に希望を聞いて実施。
- ・ケアマネによる事前指導や、同伴を開始時に行った。

<具体例：Sさん（ALS、人工呼吸器で在宅療養中、コミュニケーションは伝の心）>

- ・学生2名ずつで実施
- ・頻度は月2回程度
- ・内容は患者が詠んだ川柳や俳句をポスター化（背景等をつけて紙ベースにする）、伝の心によるコミュニケーション（おしゃべり）
- ・保健所と難病相談支援センターの同伴を開始時に行った。

活動成果報告書

3 成果

<患者・家族にとって>

- ・学生ボランティアの関わりによって、対象者と学生の取り組みが他の支援者の訪問時にも話題となり、コミュニケーションが増えた。
- ・依頼者が関心を持つ「外の世界」の情報を、学生の感性やツールの活用で提供することができ、依頼者の次の関心や興味につながっている。
- ・依頼者が学生の訪問を楽しみにされ、家族によると表情がよくなった。
- ・学生ボランティアの関与により、作品や成果物が介護保険サービス提供事業所にも展示・紹介された。

<学生ボランティアにとって>

- ・ボランティアが定着してからは、学生自らが随時直接家族と連絡をとり、日程や内容調整など行うことにより主体的な活動になっている。
- ・支援チームの調整役である介護支援専門員等との連携もとることにより、在宅療養支援チームの一員としての活動であることが認識できた。
- ・看護職を目指す学生で構成されているボランティアメンバーであり、今後の医療や保健現場での活動における、住民の健康づくりや患者支援を行う際の視点の広がりにつながった。
- ・個人の活動ではなく、ボランティアサークルとして登録、活動することにより学生の異動があっても活動が引き継がれることにより定着し、継続していくことが期待できる。

◇今後の計画

1 今後の計画

- ① 訪問診療医、介護支援専門員、訪問看護ステーション等へのPRを継続する。
- ② 学生ボランティアサークルを対象としたコミュニケーション研修等によりスキルアップを行う。
- ③ 効果的な事業となるよう、患者、家族のニーズ把握と共に、学生を含めた事業評価を実施する。
- ④ 当圏域の在宅重症神経難病患者支援事業として定着を図る。

2 特にPRしたいこと

- ・学生ボランティアを、地域の在宅療養支援チームの一つとして位置づけ、対象者と家族はもとより、支援チームにもQOL向上の活動として認知されたものとなってきた。
- ・医療、福祉、保健の専門職にはない学生の豊かな感性、新しい情報など、在宅重症神経難病患者や家族にとって、日常の療養生活に非常に良い刺激になっている。

以上